

「教材研究」が授業の基盤

これだけはやっておきたい「教材研究」

元新宿区立西戸山小学校教諭 やすだ きょうこ 安田 恭子



授業公開で「モチモチの木」の授業をしたのですが、「豆太は見た」の場面で、ある児童から、「先生、はじめ豆太は『じさまあっ。』って言っているけど、二度目は『じさまっ。』って言っていて、『あ』がありません。どうしてですか。」と聞かれて、返事ができなくて困ってしまいました。

よく「教材研究が大切だ。」という話を聞きますが、日々の仕事に追われて時間はないし、何から始めたらよいのかもわかりません。



毎日さまざまな仕事に追われ、先生方は本当に忙しいですね。

「なかなかじっくりと教材と向き合う時間も取れない。」と、悩んでいる先生も多いことと思いますが、子どもたちのためにも、自分自身のためにも、やっぱり教材研究は必要です。今回紹介するところから、少しずつ始めてみませんか。きっと授業が変わりますよ。



豆太は見た

① 豆太は、真夜中に、ひよと目をさました。頭の上で、くまのうなり声が聞こえたからだ。

② 「じさまあ。」

③ 「ま、豆太、心配すんな。じさまは、じさまは、ちよとほらがいてえだけだ。」

④ 「まくら元で、くまみたいに体を丸めてうなづいていたのは、じさまだった。」

⑤ 「医者様をよばなくつちや。」

⑥ 豆太は、子犬みたいに体を丸めて、表戸を体でふとぼして走りだした。

ねまぎのまんま。はだしで。半道もあるふもとの村まで――。

(三下 P 68～70)

1

【まずは教材文を読みましょ！】

- ・少なくとも全文を三回は読みましょ。
- ・特に物語文は、おおよその流れをつかむことが大切です。
- ・音読も忘れずにましょ。
- ・全文を音読すると何分かかるか、「モチモチの木」なら、小見出しの場面ごとにどのくらいかかるかを調べておきましょ。
- ・「視写」はたいへん有効です。
- ・「視写」をすることで、細かい描写にも気がつきます。
- ・自分が子どもなら、どこが心に残るか、どんな印象をもつか。「などを考えながら読みましょ。」

3

【文章の特徴を整理しましょ！】

- ・客観的な特徴をおさえましょ。
- 「文章構成」
- 小見出しごとの場面展開
- 「季節」
- 霜月(十一月)
- 「人物像」
- じさま↓きもすけ・やさしい
- 豆太↓強がり・泣き虫
- ・語句や漢字などの基本的な情報もチェックしておきましょ。
- ・指導書を効果的に使いましょ。

は

【指導の計画を立てましょ！】

・「この叙述で」「何を」「どうやって」「学ばせるかを考えます。上の教材文を例にとってましょ。」

① 豆太が目覚めた場面	② 豆太の言葉	③ じさまの言葉	④ 二度目の「じさま」	⑤ 豆太の言葉	⑥ 豆太の行動
倒置	豆太の心情(こわさ)	じさまの状況・くり返し(言葉)	豆太の心情(②との違い)	豆太の決意	豆太の心情
サイドラインを引かせる	板書・ノートにも	音読(なりきって)	板書・前の言葉と比較	音読(なりきって)	教師は板書・児童は視聴写・サイドライン・吹き出し
〈何を〉	〈どうやって〉				

子ども・授業を思い浮かべる教材研究

京都女子大学教授 吉永 幸司

国語の授業のあり方を考えるとき、文章を読んで、「楽しい」とか「わかった」ということで完結させてよいなら、教材研究にそれほど力を注ぐ必要はない。しかし子どもたちに文章をより深く読み取らせ、確かな力をつけたいと考えるならば、授業前の教材研究が大切になってくる。

(1) 子どもを思い浮かべて教材を読む

まずは教室の子どもを思い浮かべて読むことから始めたい。このことはそれほど難しいことではない。「この文章を音読すると、どのくらいの時間がかかるのだろう。」「この言葉は普段使わないな。」「文章の山場ではどんな感想をもつのだろう。」と、教材を読みながらつぶやくことが、子どもを思い浮かべることである。このつぶやきをそのままにしないで、時間を計りながら音読したり、難しそうな文章や語句に線を引いたり、文末の段落の意味などを考えたりしながら自問自答しているうちに、教室の風景が思い浮かぶ。「ここで、どのような発問をしようか。」「この語句の指導をどのようにしようか。」というような授業の具体的な流れが見えてくる。

(2) 教えたいことや習得させたい力を考える

国語の授業で大事にしたいのは、「先生とみんなで知恵を出

し合って文章を読むと、一人で読んでいるときよりも良い考えが生まれる。」という実感をもたせることである。そのような授業をするには、大事にしたいことや子どもたちが考えてほしいことを学習内容として整理しておかなければならない。つまり、子どもたちにつけたい力を明確にしておく必要がある。教材研究ではこのことが難しい。しかし、手がかりになるものは教科書の中にある。単元の最初に示されている、「段落のつながりに気をつけて読もう。」「表現を味わい豊かに想像しよう。」というようなリード文である。これを目安に文章を読んでいくと授業の形や方向がはっきりしてくる。また、教材の最後にある「学習」ページ(手引き)や「たいせつ」の記述も有力な手がかりとなる。

(3) 授業に役立つ発問や板書・ワークシートを想定する

指導内容がはっきりした段階で、発問や板書・ワークシートを考える。とくに発問はいろいろな展開を予想し、複数以上考えるようにする。この場合も、「この発問に、どのくらいの子どもが手を挙げるだろう。」「このワークシートでみんながうまく考えをまとめられるだろうか。」というように、実際の授業を想定して考える。このように、常に頭の中で子どもたちが活躍する姿を思い描きながら、教材を研究したい。

「教材研究」4つのメリット

- ① 軽重をつけたメリハリのある指導ができる
- ② 板書や発問、教具の使用など、事前に準備をしておける
- ③ 単元全体の見通しがつく
- ④ 児童をより深く見つめられる



3

教材をくり返し読んでいくと、自然に単元全体が把握できてきます。そうすると、常に単元全体を見通して指導計画が立てられるようになります。さらに、関連するほかの単元や教材などにも目を向けると、より指導が充実します。

1

教材文のすべてを同じように力を入れて指導しようとすると、やたらに時間がかかったり、単調な指導のくり返しになったりします。場面ごとに軽重をつけることで、指導にもメリハリをつけることができます。

4

教材研究で忘れてならないのが、クラスの児童一人ひとりを思い浮かべ、常に「あの子ならこう答えるだろう。」「この子ならこんな想像をするだろう。」と実際の授業を考えることです。また、配慮を要する子どもいますので、発問で傷つくこととはないかなど、児童をしっかり見つけたいものです。

2

指導内容をはっきりさせておくことで、「この叙述は、板書をして、表現の違いがわかるようにしよう。」とか、「ここは時間が十分とれないから、あらかじめカードに叙述を書いておこう。」など、板書や教具の準備ができます。また、発問のタイミングや内容も事前に十分検討しておくことができます。



しっかりと教材と向き合うことにより、自分自身にも自信が付き、安心して授業に臨むことができます。また、教師の自信のある指導は、児童一人ひとりに着実に学力をつける大きな原動力になります。さあ、しっかり「教材研究」をして、楽しく、自信をもって授業に臨みましょう。